

基調講演

令和4年7月3日 シンポジウム『世界史における近世城郭の意義』

『今、彦根城を世界遺産に登録する意義』



元文化庁長官

青柳正規

ただ今紹介していただいた青柳でございます。

本日は、世界遺産のことをお話しくなくてはいけません。この後、登壇いただく先生方に比べまして、私は世界遺産についての知識が乏しいものですから、世界遺産を取り囲む、その周辺のことを中心にお話したいと思います。

我々は、3・11あるいは9・11という数字をよく覚えていますが、それ以上にショッキングな数字は、やはり2・24です。もう決して起こらないだろうと思っていた世界大戦が、その2・24、ロシアのウクライナ侵入によって、ある意味では、始まっ

てしまったのです。パチカン教皇などは「もう第三次世界大戦の中にある」ということを明言しています。

私は新聞記事でしか知りませんが、少し誇張があるかもしれませんが、今現在、ウクライナが西側に要求している武器あるいは弾薬の1割ぐらいいしか届いていないと言われていいます。1割かどうかはわかりませんが、もしウクライナが望むだけの武器あるいは弾薬を全部届けてしまえば、当然、ロシアは化学兵器、あるいは核爆弾を使うようになるでしょう。そうすると本当に第三次世界大戦が始まります。ですから、決して10割の武器、弾薬を西側与えることはありません。そういう意味での

抑止力が効いています。それが解けてしまった時には、第三次世界大戦に入るのであることが明らかなきにあらぬのです。

そういう状況を踏まえた上で、UNESCOというのは、ご存知のとおり、第二次世界大戦という未曾有の人類の悲劇を、二度と起こさないようにすることを目的に作られた国際機関の一つです。UNESCO憲章の前文には、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という、第二次世界大戦以降、色々な言葉が発せられました。それらの中で最も素晴らしく、そして

我々が決して忘れてはいけない言葉が出てきています。

それを思いながら、今のウクライナの状況はどうなのかということ、私は政治・軍事のことはわかりませんが、文化の面で見ると、UNESCOのホームページに入ることにあります。そこには、「世界遺産条約ニュース」というページがあります。それを開いてウクライナの最初のページには、ウクライナで150以上の文化的施設が全部もしくは部分的に破壊されたと記載されています。最近チェックしたところでは、「UNESCOによる種々の調査の結果、ロシアの攻撃が始まった2月24日以降、そのニュースの前日

「ハーグ条約」とブルーシールド

- ・特に重要な文化遺産については国際的な管理下に置くこととする
- ・文化遺産の管理を担当する「文化財管理監」は締約国とその敵国の利益を代表する「利益保護国」の合意で選ばれ、文化遺産の識別のための特殊標準を付するなどの活動



までに、70の宗教建築物、30の歴史的建造物、18の文化センター、15の記念碑、12の博物館、7つの図書館など、合計152の文化施設が部分的、あるいは全面的に破壊されてしまった。」という記述があり、遂に、アズレイ事務局長が抗議を表明している状況です。色々な条件がありますが、過去の事例では、文化財を破

壊した者に対しては訴追される可能性が考えられます。

一方、このニュースには、「ウクライナにある UNESCO 世界遺産7件のうち、現在までに影響を受けたものはない。」とも書いてあります。つまり UNESCO は、世界遺産条約に登録されているモニュメント等の資産が非常に重要であるけれども、登録されていない様々な宗教建築などの文化財・文化資産も同様に大切であるということ、世界遺産とそうではない文化遺産の全てを同等に扱っているのです。僕は、これはすごい卓見だと思えます。しかし、UNESCOとしては、世界遺産に触れなくてはならないということ、It's should also be noted という形で書いています。非常にこれは微妙な、恐らくこれを書いた当事者は苦勞に苦勞を重ね、世界遺産を特別扱いにはしない、しかし、世界遺産には言及しなくてはならない、ということ、It's should also be noted という言葉を使っていると考えます。このことを頭に描きながら、私たちはこれからの世界遺産のことを考えていか

ねばならないのです。

なお、このニュースのところには、「10人のジャーナリストが殺された、152の cultural institutions がダメージを受けた、2028の教育施設が被害を受けた」ということを、これを一週間ごとくらいにバージョンアップしていますが、今日見たところでは6月24日以後のバージョンアップはありません。また、その中で、10人の殺されたジャーナリストたちを、明確に、一人一人固有名詞で、そして、その人の経歴とか活躍ぶりについて細部に、詳細に入っていくことができるようになっていきます。

UNESCOでは、このような戦争や紛争によって、文化遺産がダメージを受けない歯止めとするための種々の条約を作っています。これらが、よく言われる「6条約体制」です。すなわち、「ハーグ協定」、「世界遺産」、「文化財の輸出・輸入」、「水中考古学」、「無形遺産」、多様性の保護促進に関する、いわゆる「多様性保護条約」の6つの分野の条約です。

残念ながら「多様性保護条約」には、まだ日本は入っていません。これについては、いつかまたじっくりお話しをしたいと思います。

その中で、最初の「ハーグ条約」では、戦争や紛争によって文化財を破損してはいけない、戦争や紛争から文化財を守る義務があるということが、明確に記載されています。また、このハーグ条約の主旨に基づいて、大切な文化遺産であることを明確に示すために、「ブルーシールド」というエンブレムを、それぞれのモニュメントに掲示する運動も行なわれています。日本もこれを取り入れるように、今、色々と計画しています。が、まだ実行されておりません。この運動を推進しているのが、ICOMOS や、国際文書館評議会、あるいは日本も京都会議の前から入った ICOM (国際博物館会議)、さらには、図書館連盟などで、これらが中心になって「ブルーシールド」を推進し、戦争や災害から文化財を守るための国際的なシンボルマークとして使っていくべきであると活動をしています。例えば、無形遺産文化条約の会

議があった時にアゼルバイジャンのバクーに行きましたが、世界遺産の「ゴブスタン国立保護区などには、「ブルーシールド」のエンブレムが、はっきりと見えるように設置されてありました。残念ながら、日本ではまだ実行されていないので、早急に取り入れていきたいと考えています。

「世界遺産」も、UNESCOの6条約体制の一つとして位置付けられています。つまり、戦争や紛争があった時にも、人類の宝である文化遺産が、破壊行為を受けないようにしていこうという趣旨の下で、この世界遺産に関する条約ができています。世界遺産が持つている意義・価値とはどういうことかというのは、後程、もっと詳しく、専門的に説明していただけたと思いますが、少なくとも人類が生み出した様々なものの中で、過去から現在、そして未来へと継承すべきものが、顕著な普遍的価値・OUVであるという点ですが、それをしっかりと登録し、保存していこうではないかということが、この世界遺産条約の主旨なのです。

そして、彦根城にそのOUVが存在するかどうかについて、私は、非常に明快に、彦根城は世界遺産としての十分な価値を持っていると思います。例えば「彦根城を世界遺産に」というホームページを見ただけでも、これは十分に分かります。つまり、彦根城は一度も戦争の経験をしたことがない城郭であり、江戸時代には、武士達はその城郭のもとに集まり、領地の安定のため政治に取り組み、また必要となる文化活動や武芸に励み、そして安定と調和のシンボルとして、彦根城はその中心にあったのです。それが地域の人々にとって、そこに住むことの誇りの源泉になったということです。このような内容からすれば、彦根城には世界遺産になる十分な価値があると言えるでしょう。

その一方で、今、世界遺産になった、あるいは世界遺産にしようという時にどうしても忘れてはならないものに「Tourism」「観光」があります。今、UNWTO（世界観光機関）では、観光を「観光は休日の活動の

みに限定されるという一般的な認識を超えて」、「通常の環境以外の場所に、レジャーの目的で1年を超えない短期滞在をするなど、ビジネスおよびその他の目的のために24時間以上旅行すること」と定義をしています。

そして、この観光の経済的・社会的な現象は、この20〜30年で大変な勢いを持って発展しています。例えば、1995年の頃から2018年を比べると倍以上、3倍くらいに増



えており、収入では1兆4510億ドルですから、年間で200兆円くらいのボリュームにまで成長しています。人数では、14億人ほどの人々が動いているということです。大変大きな数になっていきますから、観光というものを付随的な人間の活動とみなすことは誤りで、世界にとっても絶対的に必要なものになっていると理解しなければなりません。

しかも、世界貿易の中で一番目には薬品であるとか、一番ボリュームが大きいものです。そしてその次が燃料、これは石油とか石炭です。そして、その次に観光があり、世界貿易で3位の規模となっています。車の輸出入が4番目なので、車より上位にあるのです。このように経済的な規模が大きくなっているの、観光はもはや昔のように贅沢のために旅行するというような概念、分野とは全く異なってきたのです。

そのため、世界遺産に登録することが決して観光を増大する目的では

ないとしても、必ず観光に影響されることになり得ます。そして、その観光においては、旅行者の傾向・試行は色々な形に分かれ、変化が進んでいます。自分自身の考え方を変えるため、見るため、見せるため、あるいは健康のためなど、色々な観光の目的があります。その中で最近よく言われているのが、Soft tourismです。世界遺産についていえば、文化観光であるとか、あるいは、人間の恥ずかしい面をしっかりと見ていこうとする、例えばアウシュビッツを見に行こうというような、Thana tourism というような言葉を使いますが、そういうものが含まれ、発展してきています。また、disaster tourism など様々なものが、今、考え出されています。それらの中で、私たちがSoft tourism の最も典型的なものとして、あるいは、あるべき姿として、さらに拡大させても良いのではないかと考えているのが、世界遺産とそれに関連する観光です。

先ほども申し上げましたように、世界遺産は、国際平和を目的にして作られた UNESCO という国際機関が推奨している運動です。従って、世界遺産観光とは、世界遺産に登録された「もの」を単に見に行くということにとどまらず、例えば、世界の文化の多様性を確認することができ、あるいは、それぞれの遺跡、遺物をきちっと守っていこうというところで、紛争、戦争がないように願うことに繋がるなど、これからの人類にとって、大変重要になる種々の考え方を再認識させてくれる行為でもあるのです。この意味において、この世界遺産と関連した観光が、これからより重要になり、そして、是非、拡大してもらいたいと願っているところです。

また、観光をHard tourism とSoft tourism とに分けると、Hard tourism は短期滞在型で、高速交通機関での移動という行為・現象になります。それに対してのSoft tourism です。このHard tourism とSoft tourism の関係が、一番典型的に表れているのが、スイスの観光です。スイスの観光は元々、夏の涼しい時に長期滞在、あるいは19世紀末か

らはスキーをするために冬季の長期滞在を目的とすることに発達しました。しかし、最初のきっかけは日本からの団体旅行ですが、それが徐々に、スイスの観光をSoft tourism からHard tourism に移行させ、今では特に、中国、東南アジアからの短期旅行者が多くなり、元々のSoft tourism を目的とした長期滞在者が減ってくるようになりました。スイスでは、この変化に対して、今から30年も前から、「何人の観光客が来た」ではなく、「何泊の滞在をしたのか」泊数によって観光が増えているのか減っているのかという統計をとるようになりました。これは「短期」というものなるべく避けたいが故の方針です。そして、この背景には、Mass tourism、Hard tourism が観光地に大きなストレス、負担をかけていることから、観光自体の、あるいはそれを受け止める地元の性格を変えてしまおうという危機感が存在します。すなわち、Mass tourism、Hard tourism への変化は、非常に危惧すべき現象であり、スイスでは、それに対応をしなければいけないと考え

るようになったのです。そしてこれが、Carrying capacity という考え方です。

この問題は、彦根のような11万人しか市民のいないところでは、今から十分に考えておかなければならない課題です。そして、同時に推奨すべきこのSoft tourism の終着点としての彦根城の価値、すなわち、先ほど話した「城郭が安定と調和のシンボルである。」という価値を、より多くの方々に理解していただけるような仕掛けを作ること、大変重要になると思います。そのためにも、Soft tourism の中でHeritage tourism が重要になってきますが、その作業は、UNESCO の設立の目的、文化財の保存、戦争の回避などの理念・理想に基づき、それらの実現に結び付けるべきことをしっかりと認識して、作業を進めていかなければならないと思っています。

また、Eco tourism という考え方もあります。このEco tourism の中では、小規模でボトムアップ方式で編成されたものに移行していく方法

を今、色々なNPOが考えております。さらに、Health tourismの考え方もありますし、世界遺産を中心とするCultural heritage tourismというものもあります。

このように、世界遺産になること、あるいは、なろうとすることと観光とは切ってもきれない関係にあるということ、そして、それをいかに、文化資産、地元、世界遺産の理念などと調和あるものとするかが、大変重要になってくるのです。

彦根城に限らず、あるところが世界遺産の候補になり、暫定リストに入って、実際に登録されるまでの過程の中で、世界遺産になった後の観光を、しっかりと考えておくべき必要があります。同時に、この作業は、地元住民の方々に対して、世界遺産になるべき素晴らしい歴史、あるいは平和の実現につながるような文化財を、みんなで共有しているということを理解していただき、そこに住む誇りを養うことに繋がるのではないかと思います。だからこそ、世界遺産と観光の関係は、これから非常

に重要になってくるのです。

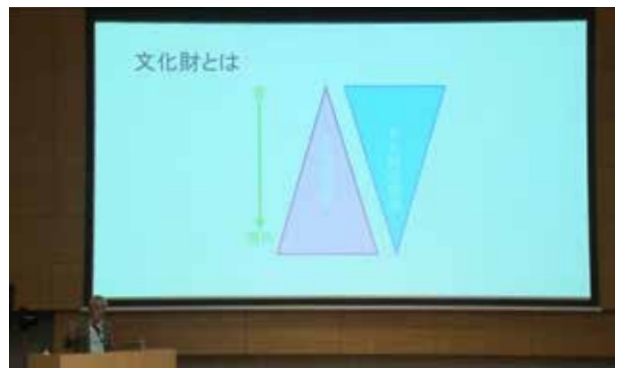
ただし、世界遺産の数については、イタリアが世界で一番多く、その次にほぼ同数で中国、その次がヨーロッパ諸国、さらに、インドやメキシコがあつて、イランがあつて、日本がこの次くらいという状況です。

さらに、最も来訪者が多いとされる世界遺産では、紫禁城、ベルサイユ宮殿、リンカーン記念堂などがあります。しかし、例えば、紫禁城にしてもその巨大さに我々は驚かされるし、明朝、あるいは清朝の頃の権勢というものを体感することはできませんが、文化財として、あるいは建築物として、どれだけの価値があるかについては疑問です。また、ベルサイユ宮殿も、17世紀中頃の立派さ、豪華さは理解できますが、例えば同じ頃に作られたタージマハールに比べて、あるいは、桂離宮と比べて、どれだけの芸術性や文化的な価値があるかという点、ベルサイユ宮殿については首を捻らざるを得ない。極端な事を言わせていただければ、文化的、芸術的な価値は、やはりタージマハールが1番で、2番が桂離宮、

3番目は絶対王朝としての権力の表明だけの価値しか無いとも思えるベルサイユ宮殿と、私は思っています。しかし、そのようなところに観光客は集まっているのです。こうした事実も、しっかりと認識する必要があります。と思っています。

最後に、世界遺産としての文化財についても考えておきたいと思っています。彦根城も、今、文化資産として世界遺産に登録しよう、そして、それを世界にも認めてもらおう、言い換えれば、彦根城を世界スタンダードの中に位置づけようとしています。

ところで、文化財というのは、極端に言うとも、古くなればなるほど数が少なくなり、現代になると数は多くなります。しかし、一般の人が見たい、訪れたいと思うのは、古い時代のものの方が多く、現代に近づけば需要が少なくなってくる傾向があります。そのため、古い時代の資産には大きなストレス、圧力が掛かります。それをどのように軽減するかということが、文化財の保存のために非常に重要な課題になっていま



す。そのことから、例えば、ヴァーチャル・リアリティとか、オーグメントド・リアリティとか、最近がよく、ミックスド・リアリティというような言葉も使いますが、あるいは、レプリカを作るなどが具体的な表現になるのですが、これらが大変注目されてきています。

その意味で、私が彦根城で一番感心しているのは、城郭の中にある博物館です。これは、当時の藩主Ⅱ名の御殿を、その場所で資料に基づ

いて復元したものを博物館として
います。こうした正しい復元は非常に
良いことです。当時の建物を復元し
た博物館としては、彦根城の博物館

は日本でも有数の存在であると捉え
ています。この意味からは、彦根城
は姫路城よりも遥かに優れていると
も言えるでしょう。彦根城ではこの
ような作業を既に実施している。そ
のうえで、文化財への関心を市民の
方々により深く持っていたと、こ
と、我々の住んでいる町には素晴ら
しい「お城」があるということ、市
民の方にも感じてもらうような取組を
強め、そのうえで、彦根城を大切に
しなくてはならない、「お城」への負
荷をなるべく除こうではないか、そ
のためにはどうすればいいのか、と
いうことを、市民のみならずまで考
える。その機会が、世界遺産に登録し
ようとする前段階での、様々な準備
作業で、今が、まさにその時なので
す。

こうした作業の結果、こういう方
法で彦根城の文化財を保護・保存し
ていこうということを地域住民が共
通認識とすることができると考えて

います。その意味からも、世界遺産
に登録することには、大変重要な価
値があります。

最後に、我々は今、現在に生きて
いますが、将来を見通すには色々な
方法があります。バックキャストイ
ングであるとか、フエアキャストイ
ングであるとか、様々な方法論が出
てきていますが、一番確実な方法は、
やはり、我々が知っている過去をい
くつか比べて、それらがどのように
変遷をしたかを、現在というフィル
ターを通してみることで、未来とい
うスクリーンにその結果を映し出すこ
とによって、初めて将来、未来とい
うものを見通すことができます。結局、
この方法しかありません。その方法
のために文化財は大変大きな役割を
持っています。だからこそ、様々な
地域において、自分たちが大切にし
ている、そして自分たちが誇りに思
う、さらに、その中で世界レベルに
おいても全く遜色なく重要であると
考えられる文化財・文化遺産を、世
界遺産にしようということになって
くるのです。そして、これが、今回

この方法しかありません。その方法

の彦根城の世界遺産にしようとい
う運動の本質ではないかと思っていま
す。是非、実現する必要があるのだ
す。

どうもご静聴ありがとうございました。